

9.2 予測及び評価

9.2.1 工事の実施及び道路の存在、自動車の走行に係る動物

1) 予測

(1) 予測の手法

工事の実施及び道路の存在、自動車の走行に係る動物の予測は、「道路環境影響評価の技術手法2007改訂版」（平成19年、財団法人 道路環境研究所）に基づき行った。

① 予測手法

重要な種等の生息環境の改変の程度を把握し、生息環境の消失・縮小の程度、重要な種等の移動経路の分断による影響等について科学的知見や類似事例を参考に予測した。

予測手順は、図8-9-2に示すとおりである。

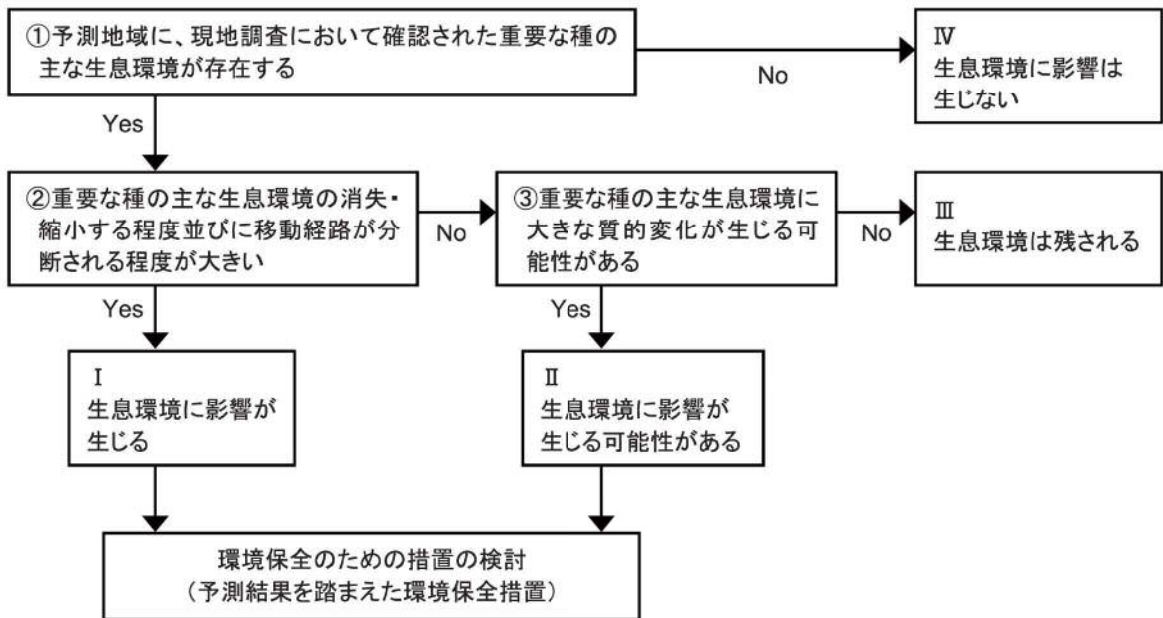


図8-9-2 重要な種に係る予測・評価の手順（動物）

② 予測地域

予測地域は、調査地域と同じとした。

③ 予測対象時期等

予測対象時期は、事業特性及び重要な種等の生態を踏まえ、影響が最大になるおそれのある時期とした。

④ 予測対象種等

予測対象種は、現地調査で確認された重要な種とした。

なお、コシダカヒメモノアラガイについては愛知県において移入種とされていることから、予測対象としない。

(2) 予測結果

重要な種に係る影響要因及び予測結果の総括は表8-9-15に、各種の予測結果の詳細は表8-9-16～表8-9-76に示すとおりである。

工事の実施における建設機械の稼働による影響については、一時的な逃避が困難であり騒音等の影響を受けやすい重要な種として、対象道路の近傍で繁殖を確認している猛禽類を対象とした。また、工事施工ヤード・工事用道路等の設置（本線工事の区域を含む）による地形改変の影響については、すべての重要な種を、水の濁りによる影響については、水域内を生息環境としている種を対象とした。

道路の存在における地形改変の影響については、すべての重要な種を、行動圏の分断による影響については、行動範囲の広い哺乳類を、道路照明の影響については、走光性や背光性のある昆虫類を対象とし、自動車の走行によるロードキルの影響については、行動範囲の広い哺乳類を対象とした。

現地調査における予測対象種の確認状況については、図8-9-3に示すとおり、調査区域を4つのブロックに区分してとりまとめた。

Aブロック：東海ジャンクション～横須賀インターチェンジ

Bブロック：横須賀インターチェンジ～長浦インターチェンジ

Cブロック：長浦インターチェンジ～県道南粕谷半田線

Dブロック：県道南粕谷半田線～常滑ジャンクション（仮称）

表8-9-15 (1) 重要な種に係る影響要因及び予測結果総括表（動物）

分類	番号	種名	工事の実施			存在及び供用				
			建設機械 の稼働	工事施工ヤード・ 工事用道路等の設置 ^{注)}		道路の存在			自動車の走行	
			騒音等	地形改変	水の濁り	地形 改変	行動圏 分断	道路 照明	ロードキル	
哺乳類	1	カヤネズミ		III		IV				
	2	テン		III		IV	III		II	
鳥類	3	ヨシゴイ		III		IV				
	4	チュウサギ		III		IV				
	5	ヒシクイ		IV		IV				
	6	オシドリ		III		IV				
	7	ミサゴ		III		IV				
	8	ハチクマ		IV		IV				
	9	オオタカ	I	III		IV				
	10	ツミ		III		IV				
	11	ハイタカ		III		IV				
	12	サシバ		IV		IV				
	13	ハイイロチュウヒ		IV		IV				
	14	ハヤブサ		III		IV				
	15	クイナ		III		IV				
	16	ヒクイナ		III		IV				
	17	タマシギ		III		IV				
	18	イカルチドリ		III		IV				
	19	ケリ		III		IV				
	20	ウズラシギ		III		IV				
	21	タカブシギ		III		IV				
	22	ヤマシギ		III		IV				
	23	コアジサシ		III		IV				
	24	オオコノハズク		III		IV				
	25	クロツグミ		III		IV				
	26	ホオアカ		III		IV				
	爬虫類	27	イシガメ		III		IV			
	両生類	28	トノサマガエル		III		IV			
29		ナゴヤダルマガエル		III		IV				
30		ツチガエル		III		IV				
魚類	31	ウナギ		III	III	IV				
	32	メダカ		III	III	IV				
	33	トビハゼ		III	III	IV				
	34	マサゴハゼ		III	III	IV				

表8-9-15 (2) 重要な種に係る影響要因及び予測結果総括表（動物）

分類	番号	種名	工事の実施			存在及び供用			
			建設機械 の稼働	工事施工ヤード・ 工事用道路等の設置 ^{注)}		道路の存在			自動車の走行
				騒音等	地形改変	水の濁り	地形 改変	行動圏 分断	道路 照明
昆虫類	35	コオイムシ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅱ	
	36	ミヤケミズムシ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅱ	
	37	コマルケシゲンゴロウ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅱ	
	38	ルイスツブゲンゴロウ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅱ	
	39	コガムシ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅱ	
	40	キオビクビボソハムシ		Ⅲ		Ⅳ			
	41	フタモンベッコウ		Ⅲ		Ⅳ			
	42	ヤマトアシナガバチ		Ⅲ		Ⅳ			
	43	アカオビケラトリ		Ⅲ		Ⅳ			
クモ類	44	コガネグモ		Ⅲ		Ⅳ			
	45	シロオビトリノフンダマシ		Ⅲ		Ⅳ			
	46	ゲホウグモ		Ⅲ		Ⅳ			
貝類	47	ヒロクチカノコガイ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	48	オオタニシ		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ			
	49	ウミニナ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	50	フトヘナタリガイ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	51	サザナミツボ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	52	カワグチツボ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	53	ワカウラツボ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	54	クリイロカワザンショウガイ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	55	ムシヤドリカワザンショウガイ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	56	ウミゴマツボ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	57	コンダカヒメモノアラガイ	予測対象としない						
	58	ナガオカモノアラガイ		Ⅲ		Ⅳ			
	59	ウネナシトマヤガイ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
	60	ヤマトシジミ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ			
61	オオノガイ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ				
62	ソトオリガイ		Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ				

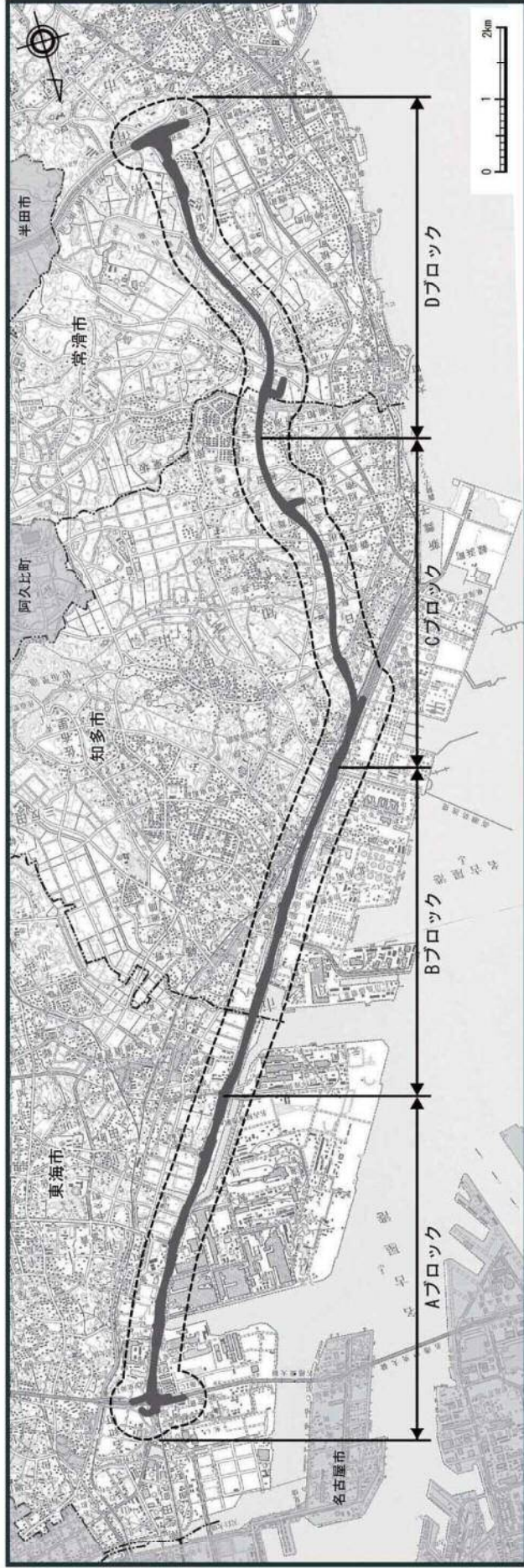
備考) Ⅰ：生息環境に影響が生じる

Ⅱ：生息環境に影響が生じる可能性がある

Ⅲ：生息環境は残される

Ⅳ：生息環境に影響は生じない

注) 工事施工ヤードには、本線工事の区域も含む。



凡例	
記号	名称
	調査地域
	ブロック区分

凡例	
	都市計画対象道路事業実施区域
	行政界


図8-9-3 動物調査地域ブロック区分

表8-9-16 重要な哺乳類の予測結果 (1. カヤネズミ)

科名	ネズミ科		 <p>確認状況(球巢)(H23. 7. 12撮影)</p>
種名	カヤネズミ		
重要性	<p>絶滅危惧Ⅱ類(VU)(レッドデータブックあいち2009)</p> <p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 国内では石川・福島県以南の本州、四国、九州とその属島に広く分布し、県内でも12市5町で生息が認められているが、各地で市街化の進行にともなう生息地の改変により生息環境が急速に失われつつある。 _1)</p> <p>〈減少の要因〉 本種はイネ科草本の草地に生息する特異な生活様式をもっているために、耕作の放棄された休耕地や県下各地に見られるため池周辺の草地に発達していたことが分布の広がりを保証していた。こうした休耕地や河川敷・ため池周辺での「整備」によってイネ科草本の植生が失われ、生息域が急速に失われつつある。 _1)</p>		
一般的な 形態・生態等	生息環境	低地から標高1,200m付近までの山地に分布するが、低地の草地に多く、森林内にはみられない。冬期は地下の坑道にすむ。草本の茎葉、種子、果実、昆虫などを食べる。野外での寿命は1年あまり。 _1)	
	形態	体重5.3～14.0g、頭胴長54.0～78.5mm、尾長47～91mm。体は非常に小さく、背面の毛色は赤褐色から暗褐色まで変異がある。腹面は白色。尾は長く、先端部の上面は裸出する。 _1)	
	分布の概要	石川・福島県以南の本州、四国、九州、隠岐道後、西ノ島、中ノ島、淡路島、豊島、因島、対馬、天草下島、福江島。ユーラシア大陸に広く分布する。 _1)	
	生息地 (愛知県内)	設楽町(旧設楽町、津具地域)、豊田市(旧豊田市、稲武地域、小原地域、旭地域、藤岡町、足助地域)、新城市鳳来地域、新城市、豊川市一宮町、豊川市、豊橋市、田原市渥美地域、岡崎市、安城市、幸田町、三好町、尾張旭市、名古屋市、北名古屋市西春町、春日井市、知多市、美浜町、南知多町。 _1)	
	繁殖期等	春から秋にかけてイネ科草本やススキのような草本の茎の途中に植物の葉を細切したものを編み上げた球巣をつくり、産仔や育仔を球巣中でおこなう。1回に2～8仔を産む。 _1)	
確認状況	Bブロックで1個、Cブロックで9個、Dブロックで1個、草地(イネ科、ススキ等)において球巣が確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の生息環境となるイネ科やススキ等からなる草地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はB・C・Dブロックの河川周辺の草地等に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 生息環境の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(草地)を参照。

表8-9-17 重要な哺乳類の予測結果 (2. テン)

科名	イタチ科		 <p>確認状況(糞) (H23. 10. 13撮影)</p>
種名	テン		
重要性	<p>準絶滅危惧(NT) (レッドデータブックあいち2009)</p> <p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 国内の主要な島々と朝鮮半島南部にのみ生息するが、現在の県内での分布は三河地域の山間部に限られ、知多半島・渥美半島および平野部では絶滅したと考えられる。三河地域での分布は比較的広いが、今後森林域の縮小や生活環境の悪化にともなって個体数が減少する可能性がある。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 県内でテンの生息が確実なのは三河地域を中心とする10市町村であり、知多半島には確かな記録がない。江戸時代には尾張地域平野部と知多半島でも生息していたので現在の分布の縮小は著しいものがある。生息数の減少は森林の縮小と生活環境の悪化が考えられる。_1)</p>		
一般的な 形態・生態等	生息環境	森林に生息し、木登りが得意で、通常は樹洞に営巣するが、人家の天井などを利用することもある。食物はネズミなどの小哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類、果実類などである。特に秋にはサルナシやアケビなどの漿果を大量に食べる。_1)	
	形態	頭胴長410～490mm、尾長170～233mm。尾率は40%以上となるのが普通。雄は雌より大きい。毛色はあざやかな黄色から褐色のもので変異に富み、黄色のものはキテン、褐色のものはスステンと一般に呼ばれている。_1)	
	分布の概要	日本と朝鮮半島にのみ生息するが、朝鮮半島では絶滅した可能性が指摘されている。_1)	
	生息地 (愛知県内)	豊根村 (旧豊根村、富山地域)、設楽町 (旧設楽町、津具地域)、東栄町、豊田市 (旧豊田市、稲武地域、旭地域、小原地域、足助地域、下山地域)、新城市鳳来地域、豊川市 (旧豊川市、一宮地域)、岡崎市額田町、幸田町、瀬戸市、尾張旭市。北海道 (導入)、本州、四国、九州、佐渡島 (導入)、淡路島、対馬に分布する。_1)	
	繁殖期等	春に2～3頭の子を出産する。_18)	
確認状況	Cブロックで1地点、樹林地内の耕作地周辺において糞が確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在・供用)	<p>本種の生息環境となる樹林地等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えらるとともに、同様の環境はC・Dブロックの丘陵地に広く分布する。</p> <p>また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。対象道路は橋梁・高架構造を多く採用しており、盛土部分においても既存の農道や水路等の通路は確保されることから、生息環境が分断される程度は小さいものと考えられる。</p> <p>しかしながら、自動車の走行によって、樹林地の一部が延長数百mの切土・盛土構造となる区間においては、本種が移動する際にロードキルが発生する可能性がある。</p> <p>以上のことから、本種の生息環境に影響が生じる可能性があるとして予測される。</p>		


備考) 生息環境の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (樹林地) を参照。

表8-9-18 重要な鳥類の予測結果 (3. ヨシゴイ)

科名	サギ科	
種名	ヨシゴイ	
重要性	絶滅危惧IB類(EN)(レッドデータブックあいち2009) 準絶滅危惧(NT)(環境省第4次レッドリスト)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期に平野部のヨシやガマが生える湿地に生息し繁殖するが、数は少ない。1970年代には、鍋田地区や汐川干潟周辺および西三河沿岸部周辺では普通に見られ、内陸のため池等でも希でなかったが、現在は全ての地域で確認が難しくなっている。県内の湿地から最も減少が著しい種のひとつであり、絶滅の危機に瀕している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 1970年代に本種が数多く生息していた鍋田地区と汐川干潟周辺からはほとんど姿を消した。近年は、庄内川河口部や矢作川・矢作古川河口周辺のヨシ原、名古屋市周辺など県内平野部の池沼で僅かに生息する。減少の要因は県内全域でのヨシ原面積の減少と、水田の転作による乾燥化で餌となる生物が減少していることがあげられる。繁殖期の天敵であるチュウヒによる捕食圧も高い。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	ヨシやガマの群落が発達した河口部、埋立地の水たまり、養魚池、ため池などの湿地に生息する。ヨシなどが密生する茂みの中でそれらの茎と葉を用いてお椀のような巣を作る。採餌には繁殖場所の池だけでなく周辺のヨシ原や水田などへ出掛けて魚類、カエル、ザリガニなどを捕食する。_1)
	形態	全長31～38cmの小型のサギ類。上面が茶褐色で下面は黄白色。飛行時に茶褐色の雨覆と黒色の風切のコントラストが鮮明。頭上の色は、雄の成鳥では黒く雌の成鳥では赤褐色。幼鳥は、体全体に黒褐色の縦斑がある。_1)
	分布の概要	東アジアから東南アジア、インドにかけてと、ミクロネシア西部、セーシェル諸島にかけて分布する。日本には主に夏期に渡来し、九州以北で繁殖する。本州中部以西では越冬するものもある。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、夏期に河口部や平野部にある池沼のヨシ原に生息し繁殖する。_1)
	繁殖期等	夏鳥。繁殖期は5～8月、年に1回の繁殖が普通である。_5)
確認状況	Dブロックで1個体、ため池において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖・採餌環境等となるヨシ群落が発達する湿地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックのため池や水辺等に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	

備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-19 重要な鳥類の予測結果 (4. チュウサギ)


科名	サギ科		 <p>確認個体 (H23. 7. 13撮影)</p>
種名	チュウサギ		
重要性	準絶滅危惧 (NT) (環境省第4次レッドリスト) 〈減少の要因〉 かつてはシラサギ類コロニーの中で優占種であったが、1970年代以降は全図的に減少している。農薬汚染などによって餌動物が減ったこと、宅地開発などによって繁殖できる林が伐採されることが、個体数の減少に影響していると考えられる。_3) 社会的背景として、市街地の拡大や圃場整備等により、営巣地としての安全な樹林が少なくなり、また、採食地としての広大な水田 (湿地)、池沼が失われている。_11)		
一般的な形態・生態等	生息環境	食物は昆虫類が多く、次いで魚類との報告がある。_3)	
	形態	全長は約56～72cm。雌雄同色。全身白色で、繁殖期には胸と肩羽に飾り羽が生じる。嘴はやや短めで、繁殖期には黒色で目先は鮮黄色。非繁殖期の嘴は黄色。脚は長く黒色。_3)	
	分布の概要	アジア、アフリカ、オーストラリアに分布し、北部の個体は冬期南へ渡る。_3)	
	生息地	平地の水田、湿地、ときには大きな川に生息する。_5)	
	繁殖期等	夏鳥。繁殖期は4～9月。_5)	
確認状況	Aブロックで延べ4個体、Bブロックで1個体、Cブロックで延べ5個体、Dブロックで延べ約20個体、水田やため池において確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖地は確認されず、対象道路付近における繁殖の可能性は低いと考えられることから、繁殖への影響はないと考えられる。 採餌環境等となる水田等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの河川やため池周辺に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (耕作地(水田)) を参照。

表8-9-20 重要な鳥類の予測結果 (5. ヒシクイ)


科名	カモ科	
種名	ヒシクイ	
重要性	天然記念物 絶滅危惧Ⅱ類(VU)(環境省第4次レッドリスト)	
	<p>〈減少の要因〉</p> <p>1945年以前には、農地への転換のために、生息適地である池沼の干拓がひろく行われてきた。また、1971年に狩猟鳥から除外されたが、それまでに多数が狩猟されてきた。主要な繁殖地であるロシアでは狩猟鳥である。_3)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	池沼、湖沼、水田の刈り取り跡などに生息する。イネ科植物の葉や種子をよく食べるが、ヒシ類の実を主に食べる。_3)
	形態	オス全長90cm、メス75cm。全体は暗褐色で、上尾筒、下尾筒は白色。嘴は黒色で先の方に橙黄色の帯がある。脚は橙黄色。_3)
	分布の概要	ロシア極東のハタंगाからアナディールまでとチュコト半島のツンドラ地帯で繁殖する。冬期には、中国、朝鮮半島、日本などに渡って越冬する。_3)
	生息地	日本には冬鳥として少数が渡来するのみ。日本での越冬地は、宮城県の伊豆沼、蕪栗沼、化女沼ならびにこれら湖沼よりも南の仙台平野北部水田地帯などである。_3)
	繁殖期等	迷鳥。繁殖期は5～7月。_5)
確認状況	Cブロックで5個体の集団による飛翔が確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の確認回数は少なく、「愛知県鳥類目録2002」において迷鳥とされている。以上のことから、本種の生息環境に影響は生じない。	

表8-9-21 重要な鳥類の予測結果 (6. オシドリ)

科名	カモ科		 <p>確認個体 (H23. 10. 13撮影)</p>
種名	オシドリ		
重要性	情報不足 (DD) (環境省第4次レッドリスト) 〈減少の要因〉 針葉樹人工林の増加により主要な食物であるドングリのなる樹種の減少や越冬地となる水域の減少など生息環境が悪化・減少している。 越冬数は2万羽前後であるが、繁殖期の生息数に関する資料は少ない。_2)		
一般的な 形態・生態等	生息環境	低地から亜高山帯にかけて広くみられる。繁殖期には、大木の多い広葉樹林内の河川、湖沼にする。とくにミズナラの多いブナ林、シイ・カシ林などを好む。冬は山間の河川、ダム湖、湖沼、樹林に囲まれた池、ため池などでみられる。雑食性だが主として植物食である。草の種子、樹木の果実、水生昆虫などを食べるが、とくにシイ、カシ、ナラ類のどんぐりを好む。_5)	
	形態	カモ類の中では小型で、夏羽の雄ではオレンジ、紫、緑など派手な色で、銀杏羽が特徴的。雌と冬羽 (エクリプス) の雄は灰褐色。_2)	
	分布の概要	繁殖期は主に本州中部以北、非繁殖期は沖縄から北海道まで分布する。_2)	
	生息地	北海道、本州、九州で繁殖する。冬は本州以南ですごす。_5)	
	繁殖期等	留鳥。繁殖期は4～7月。_5)	
確認状況	Cブロックで2個体、Dブロックで1個体、ため池において確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖・採餌環境等となるため池は、対象道路により一部改変されるが、同様の環境はC・Dブロックに広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-22 重要な鳥類の予測結果 (7. ミサゴ)

科名	タカ科		 <p>確認個体 (H23. 2. 9撮影)</p>
種名	ミサゴ		
重要性	準絶滅危惧 (NT) (レッドデータブックあいち2009) 準絶滅危惧 (NT) (環境省第4次レッドリスト)		
	〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 伊勢湾・三河湾沿岸を中心に主として冬期に生息するが、三河湾島嶼部で繁殖記録が1例あるだけで、繁殖種の側面からは希少である。_1) 〈減少の要因〉 魚類の捕食を経由した残留性農薬やPCB汚染による減少が指摘され、世界的に減少傾向とされるが、近年、庄内川河口をはじめ伊勢湾や三河湾の各地ではそれぞれ数羽から10羽が生息しており緩やかな回復傾向にあると考えられる。_1)		
一般的な 形態・生態等	生息環境	海岸、河川、湖沼などの上空を飛び時に停止飛翔を行いながら水中の魚を探し、ダイビングして捕まえ、河畔林の樹上などに運び採食する。浅瀬のノリソダや杭に止まって休息することも多い。人が近寄りた海岸の断崖や尖塔状の岩の頂上、水辺付近のマツやモミなどの大木に営巣することが多い。_1)	
	形態	雄は全長56～60cm、翼開長147～166.5cm、雌は全長57.5～61.5cm、翼開長154～168.5cm。背と翼上面が暗褐色で、頭部から腹にかけての下面は白色で、目先から頸側を経て後頸にいたる太くて暗褐色の帯がある。胸に黒色と暗褐色の縦斑からなる帯があることが多い。_1)	
	分布の概要	広く世界に分布し、北方のものは冬期に南下する。日本では、九州以北で繁殖し周年生息するが、北海道では夏鳥で、本州中部以西では冬期によく見られる。_1)	
	生息地 (愛知県内)	県内では、主に冬期に伊勢湾、三河湾沿岸、河川で見られ、繁殖例もある。_1)	
	繁殖期等	留鳥。主として冬期に生息するが、三河湾島嶼部で繁殖記録が1例ある。_1)	
確認状況	一般鳥類調査では、Aブロックで2例、Bブロックで2例、Cブロックで2例、Dブロックで3例、河川の上空等において確認された。 猛禽類調査では、本種の繁殖行動は確認されなかった。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖に関する行動は確認されず、対象道路付近における繁殖の可能性は低いと考えられることから、繁殖への影響はないと考えられる。 採餌環境等となる河川やため池は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えたとともに、同様の環境はA・B・C・Dブロックに広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (河川・ため池・湿地) を参照。

表8-9-23 重要な鳥類の予測結果 (8. ハチクマ)



科名	タカ科		 <p>確認個体 (H23. 6. 10撮影)</p>
種名	ハチクマ		
重要性	<p>絶滅危惧Ⅱ類(VU) (レッドデータブックあいち2009) 準絶滅危惧(NT) (環境省第4次レッドリスト)</p> <p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期に平地に面した丘陵地から標高の高い山地までに生息し繁殖するが数は少ない。繁殖期の行動圏が他のタカ類に比較してかなり広いことで生態を把握することが難しく、育雛期以降の餌をハチ類の幼虫に大きく依存していることや、人里近くの林に生息することで開発等の影響を受けやすいことなどから、絶滅の可能性が増大しているものと考えられる。 _1)</p> <p>〈減少の要因〉 尾張、西三河、東三河の丘陵地で少数の繁殖が確認されているほか、茶臼山周辺などの山間部でも繁殖期の記録がある。元来数が少ないことに加え、育雛期の餌の多くをハチ類に依存しており、人里近くに生息するため林地開発等の影響を受けやすい。 _1)</p>		
一般的な形態・生態等	生息環境	<p>本州には5月上旬に渡来し、9月から10月にかけて越冬地へ渡去する。主な生息地は針広混交林を含む丘陵地で、アカマツやナラ類などの樹上に営巣し通常2卵を産む。ハチ類の幼虫を好んで餌とすることで知られており、ハチ類の巣の少ない渡来当初は主にカエルやヘビなどの小動物を捕食する。 _1)</p>	
	形態	<p>全長は57～60.5cm、翼開長121～135cmの比較的大型のタカ。翼は長くて幅広い。羽色は、淡色型、中間型、暗色型とバリエーションがあり、さらに雌雄や年齢で異なるため複雑である。基本的には、尾羽と風切の横帯が雄成鳥の場合は太く明瞭で、雌成鳥または幼鳥の場合は細くあまり目立たない。 _1)</p>	
	分布の概要	<p>ヨーロッパから小アジア、バイカル湖を経てロシア東北部、中国東北部、日本、インドから東南アジアにかけて繁殖し、アフリカ、東南アジアで越冬し、全6亜種に分けられる。日本では、北海道、本州、四国、九州に夏期に渡来し繁殖する。 _1)</p>	
	生息地 (愛知県内)	<p>春秋の渡り季節には平野部でも見られる。 _1)</p>	
	繁殖期等	<p>夏鳥。県内では、夏期に丘陵地から山間部に生息し繁殖する。 _1)</p>	
確認状況	<p>一般鳥類調査では、Aブロックで1個体、Cブロックで延べ2個体、Dブロックで1個体、耕作地等の上空において確認された。 猛禽類調査では、本種の繁殖行動は確認されなかった。</p>		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	<p>本種の猛禽類調査における確認回数は少なく、繁殖に関する行動も確認されなかったことから、対象道路付近における繁殖の可能性は低く、繁殖や採餌への影響はないと考えられる。 以上のことから、本種の生息環境に影響は生じないと予測される。</p>		

表8-9-24 重要な鳥類の予測結果 (9. オオタカ)

科名	タカ科		
種名	オオタカ		
重要性	準絶滅危惧 (NT) (レッドデータブックあいち2009) 準絶滅危惧 (NT) (環境省第4次レッドリスト) 国内希少野生動物 (種の保存法)		確認個体 (H23. 10. 13撮影)
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 近年は平野部や都市部への進出例が多く確認されるようになったが、いずれも周辺には広大な農地や河川敷など餌場の存在が不可欠である。平野部における営巣場所は猛禽の繁殖には極めて不安定で脆弱であり、容易に消滅するおそれがある。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 近年、県内各地で丘陵地だけでなく平野部での繁殖が相次いで確認されている。本種は、本来丘陵地で繁殖するものであり、平野部への進出は本種の生息条件の悪化を示唆しているものと考えられる。_1)</p>		
一般的な 形態・生態等	生息環境	アカマツなどの営巣に適した高木を含む森林と、農地などの開けた場所がパッチ状に存在する環境などに生息し、主に鳥類、時に小型の哺乳類を捕食する。非繁殖期には雄がテリトリーに残り雌は移動するものと思われ、冬期に海岸部や河畔林などに生息するものの大半は雌または幼鳥である。_1)	
	形態	全長は雄が47～52.5cm、雌が53.5～59cm、翼開長106～131cmの雌雄二型。成鳥は頭部から背と翼上面にかけて暗青灰色で、白く明瞭な眉斑があり、下面は白色で、胸から腹および脛にかけて黒褐色の細かい横斑がある。_1)	
	分布の概要	ユーラシア大陸と北アメリカ北部に広く分布し、7～10亜種に分けられ北方のものは冬期に南へ移動する。日本では、北海道と本州に周年生息し繁殖し、四国、九州では主に冬期に生息する。_1)	
	生息地 (愛知県内)	県内では、丘陵地から山間部の林に周年生息し繁殖する。冬期には河川敷や農耕地など平野部でも見られる。_1)	
	繁殖期等	留鳥。求愛期は早いものでは1月に始まり、本格的な巣造りは3月で、4～5月頃産卵する。孵化は5～6月で、幼鳥は6～7月に巣立ち、早いものでは8月中に独立し分散する。_6)	

[オオタカ続き]

<p>確認状況</p>	<p>一般鳥類調査（A、C、Dブロック）および猛禽類調査で確認された。猛禽類調査の結果、5地域で繁殖（抱卵まで至ったペア）が確認された。各地域における繁殖状況は以下のとおりである。</p> <table border="1" data-bbox="370 349 1361 996"> <thead> <tr> <th>地域</th> <th>調査年</th> <th>営巣地と対象道路との距離</th> <th>繁殖状況</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">ア</td> <td>H21</td> <td>約200m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H22</td> <td>約200m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H23</td> <td>約200m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> <tr> <td>H24</td> <td>約200m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">イ</td> <td>H22</td> <td>約1000m</td> <td>抱卵期に中断</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H23</td> <td>—</td> <td>繁殖行動・巣利用なし</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H24</td> <td>—</td> <td>繁殖行動・巣利用なし</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">ウ</td> <td>H21</td> <td>約2000m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H22</td> <td>約2000m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H23</td> <td>約2300m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> <tr> <td>H24</td> <td>約2200m</td> <td>造巣期に中断</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">エ</td> <td>H21</td> <td>—</td> <td>造巣期に中断</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H22</td> <td>約1400m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>行動圏調査実施</td> </tr> <tr> <td>H23</td> <td>約1500m</td> <td>抱卵期に中断</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> <tr> <td>H24</td> <td>約1500m</td> <td>造巣期に中断</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> <tr> <td>オ</td> <td>H24</td> <td>約100m</td> <td>幼鳥の巣立ちを確認</td> <td>繁殖状況調査のみ</td> </tr> </tbody> </table> <p>※オ地域での繁殖は、ア～エ地域の2営巣期にわたる現地調査（H21～H23）終了後に確認されたものである。営巣中心域は、「猛禽類保護の進め方（改訂版）」（平成24年、環境省）を参考に、営巣木を中心として半径300mの範囲と想定した。</p>	地域	調査年	営巣地と対象道路との距離	繁殖状況	備考	ア	H21	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施	H22	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施	H23	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ	H24	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ	イ	H22	約1000m	抱卵期に中断	行動圏調査実施	H23	—	繁殖行動・巣利用なし	行動圏調査実施	H24	—	繁殖行動・巣利用なし	繁殖状況調査のみ	ウ	H21	約2000m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施	H22	約2000m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施	H23	約2300m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ	H24	約2200m	造巣期に中断	繁殖状況調査のみ	エ	H21	—	造巣期に中断	行動圏調査実施	H22	約1400m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施	H23	約1500m	抱卵期に中断	繁殖状況調査のみ	H24	約1500m	造巣期に中断	繁殖状況調査のみ	オ	H24	約100m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ
地域	調査年	営巣地と対象道路との距離	繁殖状況	備考																																																																							
ア	H21	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施																																																																							
	H22	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施																																																																							
	H23	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ																																																																							
	H24	約200m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ																																																																							
イ	H22	約1000m	抱卵期に中断	行動圏調査実施																																																																							
	H23	—	繁殖行動・巣利用なし	行動圏調査実施																																																																							
	H24	—	繁殖行動・巣利用なし	繁殖状況調査のみ																																																																							
ウ	H21	約2000m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施																																																																							
	H22	約2000m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施																																																																							
	H23	約2300m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ																																																																							
	H24	約2200m	造巣期に中断	繁殖状況調査のみ																																																																							
エ	H21	—	造巣期に中断	行動圏調査実施																																																																							
	H22	約1400m	幼鳥の巣立ちを確認	行動圏調査実施																																																																							
	H23	約1500m	抱卵期に中断	繁殖状況調査のみ																																																																							
	H24	約1500m	造巣期に中断	繁殖状況調査のみ																																																																							
オ	H24	約100m	幼鳥の巣立ちを確認	繁殖状況調査のみ																																																																							
<p>予測結果 （工事の実施及び道路の存在）</p>	<p>ア・オ地域： 対象道路は高利用域及び営巣中心域の一部を通過するが、営巣林は改変されず、採餌環境等はC・Dブロックの丘陵地や耕作地、水辺等に広く分布する。 しかしながら、繁殖期に工事が行われる場合には、建設機械の稼働等により繁殖への影響が生じると予測される。</p> <p>エ地域： 対象道路は高利用域の一部を通過するが、営巣地から離れており、採餌環境等はC・Dブロックの丘陵地や耕作地、水辺等に広く分布することから、生息環境は残ると予測される。</p> <p>イ・ウ地域： 対象道路は営巣地から離れていることから、生息環境に影響は生じないと予測される。</p> <p>なお、いずれの地域においても、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はなく、生息環境は残ると予測される。</p>																																																																										


備考）行動圏解析結果については資料編、採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10（樹林地、草地、耕作地、河川・ため池・湿地）を参照。

表8-9-25 重要な鳥類の予測結果 (10. ツミ)

科名	タカ科	
種名	ツミ	
重要性	準絶滅危惧 (NT) (レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 平野部から山間部の林に生息し繁殖するが数は少ない。生息状況は不明な点が多いが、既知の生息地は限られており生息条件の変動によりさらに減少する可能性がある。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 繁殖期の記録は、丘陵地や山間部に限られており、営巣は新城市 (旧作手村) などごく少数が知られるのみであったが、1994年に名古屋市内の公園で繁殖が確認された。関東地方の調査結果から、都市部への生息地拡大は限界があるものと推察されるため、今後は再び平野部から姿を消す可能性がある。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	丘陵地や山間部の混交林から平野部の都市公園に生息し、繁殖する。主に小型の鳥類を捕食し、アカマツやヒノキなどで営巣することが多い。県内では一年を通じて記録があるが、非繁殖期の生息状況は明らかでない。_1)
	形態	全長は雄が25~27.5cm、雌が28.5~31.5cm、翼開長51.5~62cmの雌雄二型。雄は頭部から背と翼上面にかけて暗青灰色、下面は白く胸から脇にかけて淡橙色で、目は暗紅色。雌は上面に暗褐色味を帯び、下面は白く胸から脇、脛にかけて暗褐色の細かい横斑があり、目は黄色く細い眉斑がある。幼鳥は雌に似るが、胸に縦斑があり脇の横斑は太くて粗い。飛翔時は、他のタカ類に比べて頭が大きめで翼が短かめに見える。_1)
	分布の概要	中央シベリア南部からモンゴル北部、中国東北部、朝鮮、アムール地方、ウスリー地方、サハリンで繁殖し、冬期は中国東南部、台湾、東南アジアなどに生息する。日本では、北海道、本州、四国、九州、南西諸島で繁殖する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、平地から丘陵地及び山間部の林に生息し、一年を通じて記録がある。_1)
	繁殖期等	留鳥。繁殖テリトリーに3月末から4月初めには戻る。_7)
確認状況	一般鳥類調査では確認されなかった。 猛禽類調査時 (平成21年) において、延べ2個体確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の猛禽類調査における確認回数は少なく、繁殖に関する行動も確認されなかったが、本種は樹林地の他、平野部の都市公園においても生息し繁殖するとされている。本種の繁殖・採餌環境等となる樹林地や公園・街路樹等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はA・B・C・Dブロックの丘陵地から低地部に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	

備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (樹林地、公園・街路樹等) を参照。

表8-9-26 重要な鳥類の予測結果 (11. ハイタカ)

科名	タカ科		 <p>確認個体 (H23. 3. 10撮影)</p>
種名	ハイタカ		
重要性	準絶滅危惧 (NT) (環境省第4次レッドリスト) 〈減少の要因〉 個体数の動向は不明である。森林伐採、自然林の減少、殺虫剤の散布などによって汚染された小鳥類を捕食して起こる二次的汚染は、本種の生息にきわめて悪い影響を及ぼすと考えられるので、個体数や生息状況に関する調査を早急に行うことが必要である。_3)		
一般的な形態・生態等	生息環境	本州では標高700～2,500mの山地の針葉樹に枝で浅い碗型の巣を作り、4～5卵を産む。雛は32-34日で孵化し、30日前後で巣立つ。_3)	
	形態	全長オス32cm、メス39cmのハトほどの大きさの猛禽類である。成鳥のオスは上面が暗い青灰色で、腹部や胸部には白地にオレンジ色の細い横斑がある。メスは上面が灰色を帯びた暗褐色で、腹部や胸部には白地に暗褐色の横斑がある。_3)	
	分布の概要	冬期は全国で見られる。_3)	
	生息地	秋の渡りの中心は10～11月で、北海道の室蘭では10月の中旬、本州中部の伊良湖崎では11月の初旬にピークを迎える。_3)	
	繁殖期等	冬鳥。遅くとも3月から4月中旬には繁殖テリトリーに戻っていると推察される。_7)	
確認状況	一般鳥類調査では、Aブロックで1個体、Bブロックで1個体、Cブロックで1個体、耕作地等の上空において確認された。 猛禽類調査では、オオタカに次ぐ個体数(延べ)が確認された。越冬しているものと考えられる。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の採餌環境等となる樹林地や耕作地等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの低地部に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (樹林地、耕作地) を参照。

表8-9-27 重要な鳥類の予測結果 (12. サシバ)

科名	タカ科	
種名	サシバ	
重要性	絶滅危惧Ⅱ類(VU)(レッドデータブックあいち2009) 絶滅危惧Ⅱ類(VU)(環境省第4次レッドリスト)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期に丘陵地から山間部の林に生息し繁殖するが数は少ない。かつては繁殖期に県内全域の山地や丘陵部の里山環境で普通に見られたが、近年は知多半島をはじめ丘陵部での繁殖が消滅あるいは激減している。伊良湖岬では、秋期の渡り時期に当地を通過する個体数が1990年から減少している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 県内全域の山地や丘陵地で繁殖していたが、近年知多半島や平野部に近い丘陵地では繁殖が確認されなくなっている。繁殖に必要な里山環境が、水田の耕作放棄や転作により餌となる両生類や爬虫類が減少していること。県内の丘陵部全般に展開されている開発などにより、生息できる環境が喪失していることが減少の要因である。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	本州には3月下旬に渡来し、9月から10月にかけて越冬地へ渡去する。平地から低山帯に生息し、アカマツ林を含む雑木林またはスギ・ヒノキの植林地などで繁殖する。水田、畑、湿地、伐採跡地などの開けた土地で狩りを行うことが多く、谷に田が入り込んだ里山環境を主な生息地としている。主に、カエル、ヘビ、トカゲ、昆虫類を捕食し、ヒミズ、ネズミ、鳥類を採ることもある。_1)
	形態	全長47～51cm、翼開長102.5～115cm。翼は長くてやや細い。成鳥は、頭から背にかけて赤みのある褐色で、腹に茶褐色の横斑、喉の中央に明瞭な縦線が1本あり、目は黄色。雄成鳥は、頭部に灰色味が強い。_1)
	分布の概要	アムール地方南部、ウスリー地方、中国東北部、朝鮮半島北部、および日本で繁殖し、南西諸島、台湾、中国南部、ミャンマー、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、マルク諸島、ニューギニアなどで越冬する。国内では、北海道を除く全国で繁殖し、南西諸島では少数が越冬する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、夏期に丘陵地から山間部に生息し繁殖する。秋の渡り時期には平野部でも見られる。_1)
	繁殖期等	夏鳥。繁殖開始は4月ごろ。7月中は巣立ち後3週間程度に相当する。_6)
確認状況	一般鳥類調査では確認されなかった。 猛禽類調査では、飛翔が確認されたが少数であり、繁殖行動は確認されなかった。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の猛禽類調査における確認回数は少なく、繁殖に関する行動も確認されなかったことから、対象道路付近における繁殖の可能性は低く、繁殖や採餌への影響はないと考えられる。以上のことから、本種の生息環境に影響は生じないと予測される。	

表8-9-28 重要な鳥類の予測結果（13. ハイイロチュウヒ）


科名	タカ科		 <p>確認個体 (H23. 3. 9撮影)</p>
種名	ハイイロチュウヒ		
重要性	<p>準絶滅危惧 (NT) (レッドデータブックあいち2009)</p> <p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 冬期に、主に伊勢湾、三河湾沿岸部のヨシ原および周辺の農耕地に生息するが数はごく少ない。こうした環境は変動性が高いためさらに減少する可能性がある。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 県内の安定した生息地は、鍋田地区周辺、矢作川河口周辺、豊川河口周辺、汐川干潟周辺の農耕地にほぼ限られ、数もごく少ない。越冬のためには、農耕地や荒地などの餌場と、ねぐらを形成するためのヨシ原が一体的に確保される必要があるが、こうした環境は遊休地の土地利用や植生の遷移により喪失されやすい。_1)</p>		
一般的な 形態・生態等	生息環境	冬期に、沿岸部のヨシ原を中心に周辺の農耕地を含む広い行動圏を持ち、低空を軽やかに飛び回り地上のネズミ類や小型の鳥類を捕食する。ヨシ原で、チュウヒに混じり1～数羽でねぐらをとることが知られている。_1)	
	形態	全長は雄が43～47cm、雌が48.5～53.5cm、翼開長は98.5～123.5cmの雌雄二型。雄は、上面全体と顔から胸および尾羽が淡灰色で、腹が白く外側初列風切が黒い。雌は、上面が全体的に暗灰褐色で、下面は淡褐色または赤褐色で前頸から腹にかけて暗褐色の縦斑があり、風切と尾は灰褐色で太くて明瞭な横斑があり、腰が白い。雄、雌ともに目と脚が黄色。_1)	
	分布の概要	極北を除くユーラシア大陸北部と北アメリカ大陸北部で繁殖し冬期は南下する。冬期はユーラシアでは、ヨーロッパ中南部、中近東北部、インド北部、インドシナ北部、中国南東部、台湾、朝鮮半島南部などに生息する。日本では、冬期に北海道から九州にかけて渡来し、南西諸島からも記録がある。_1)	
	生息地 (愛知県内)	県内では、冬期に伊勢湾、三河湾沿岸のヨシ原および周辺の農耕地に生息し、時に内陸の高原や里山で記録されることがある。_1)	
	繁殖期等	冬鳥。日本では繁殖しない。_7)	
確認状況	一般鳥類調査では確認されなかった。 猛禽類調査では、飛翔が確認されたが少数であった。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の猛禽類調査における確認回数は少なく、対象道路付近における越冬の可能性は低いと考えられる。 以上のことから、本種の生息環境に影響は生じないと予測される。		

表8-9-29 重要な鳥類の予測結果 (14. ハヤブサ)

科名	ハヤブサ科	
種名	ハヤブサ	
重要性	絶滅危惧IB類(EN)(レッドデータブックあいち2009) 絶滅危惧II類(VU)(環境省第4次レッドリスト) 国内希少野生動物(種の保存法)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 野生生態系の頂点に位置する種である。採餌方法は飛行中の鳥類の空中捕獲がほとんどであるが、捕食対象種であるシギ類やチドリ類、カモ類などの生息数は大きく減少している。近年は都市部に多く生息するドバト等を捕食の対象として都市部の人工物で営巣する例も報告されているが、生息に必要な行動圏が極めて広いため、生息数は限られている。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 県内での繁殖は、1996年に初めて確認された。現在県内では繁殖期に4~5番い程度の生息が確認されており、都市部のものは人工建造物に営巣して主にドバトなどを捕食している。県内で繁殖の確認がされる例は少なく、繁殖できなかった例が大半を占める。越冬期の生息数には増加傾向がみられず、本来の餌であるカモ類やシギ類、チドリ類などの減少がこの種の生息数に関与しているものと考えられる。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	海岸などの高い崖で繁殖するが、近年は都市部にある建造物での繁殖も確認されている。沿岸部を主な生息地とするが、山間部で観察されることもある。冬期は平野部を中心に生息し、河川や海岸などの開けた水辺に群れるカモ類、農耕地に群れるハト類や小鳥等を捕食する。_1)
	形態	雄は全長38~44.5cmで翼開長84~104cm、雌は全長46~51cmで翼開長111~120cm。成鳥では、頭部、上面、尾羽は黒味の強い青灰色で、下面は白く胸から腹、脇、脛にかけて細かい横斑がある。頬には髭状の黒い斑があり、目の周辺に黄色の縁取りがある。_1)
	分布の概要	南極圏を除き広く世界中に分布する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、沿岸部の限られた地域に生息し繁殖する。冬期は、平野部の水辺を中心に県内各地で記録がある。_1)
	繁殖期等	留鳥。春から繁殖活動に入る。産卵は3月中旬から4月上旬。4月中旬から5月中旬にかけて孵化する。_7)
確認状況	一般鳥類調査では確認されなかった。 猛禽類調査では、飛行が確認されたが少数であり、繁殖行動は確認されなかった。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖に関する行動は確認されず、対象道路付近における繁殖の可能性は低いと考えられることから、工事の実施による繁殖への影響はないと考えられる。 採餌環境等となる開けた水辺や耕作地等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えけるとともに、同様の環境はA・B・C・Dブロックの沿岸部や低地部に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(耕作地、河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-30 重要な鳥類の予測結果 (15. クイナ)

科名	クイナ科	
種名	クイナ	
重要性	準絶滅危惧(NT) (レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 冬期に平野部の淡水湿地に生息し、かつては広く県内各地で普通に見られたが、近年は減少傾向にある。池沼の埋め立てや改変、河川や水路の改修による岸辺環境の改変により、生息条件が悪化している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 かつては、県内の平野部広くで普通に見られたが、護岸や水草の除去などにより水辺環境が人工化され、特に都市近郊で生息地が減少した。山間部における生息状況は明らかでないが、数は少ないものと考えられる。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	冬期に平地から低山の休耕田や湿田、河川や池沼の畔水田などの淡水湿地に、単独または数羽で生息し小動物を捕食する。_1)
	形態	全長28～29cm。成鳥は、頭頂、後頸から体上面は暗いオリーブ色で黒色の縦斑がある。顔、喉、胸は青灰色で、腹、脇は黒色地に白色の横斑がある。嘴は長めで赤く、冬羽では上嘴が黒っぽい。_1)
	分布の概要	ユーラシア大陸の温帯域で繁殖し4亜種に分けられる。北方のものは南下し、冬期には中国南部、東南アジアなどに生息する。日本では、北海道と本州北部では夏期に生息し、本州、四国、九州、南西諸島では冬期に生息する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、主として平野部に冬期に生息するが、丘陵地や山間部でも記録がある。_1)
	繁殖期等	冬鳥。繁殖期は5～8月。_5)
確認状況	Dブロックで1個体、河川内の湿地植生において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の採餌環境等となる水田や淡水湿地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの低地部や水辺等に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (耕作地(水田)、河川・ため池・湿地) を参照。

表8-9-31 重要な鳥類の予測結果 (16. ヒクイナ)

科名	クイナ科	
種名	ヒクイナ	
重要性	絶滅危惧Ⅱ類(VU)(レッドデータブックあいち2009) 準絶滅危惧(NT)(環境省第4次レッドリスト)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期に平野部から山地の淡水湿地に生息し繁殖する。かつては、県内平野部の各地で普通に見られたが、都市化の進展、水辺環境や水田を含む湿地環境の環境悪化、喪失に伴い生息に適した環境が少なくなり、数が減少した。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 かつては、県内の平野部広くで普通に見られ各地で繁殖記録があったが、近年は、特に尾張地域では姿を見ることが難しい程にまで減少し、西三河地域の水田地帯においても繁殖記録は希である。山間部における生息状況は明らかでないが、数は少ないものと考えられる。都市化の進展や水田の乾田化などに伴い、生息に適した環境が少なくなり個体数が減少した。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	夏期に平地から低山の休耕田や湿地、河川や池沼の畔水田などの淡水湿地に生息する。なわばり性で主に単独か番いで生活し、水生昆虫や軟体動物、水生植物の若葉などを採食する。繁殖期には、キョツ、キョツ、キョツ・・・と続けて鳴き、途中でテンポが早くなる。近年は都市部の遊水池や水路にできた小面積のアシ原で、繁殖期の生息が確認されることもある。_1)
	形態	全長21～23cm。成鳥は、頭部から腹にかけて赤褐色、上面は一様な暗緑褐色で、下尾筒は黒色地に白色の横斑がある。嘴は黒く脚と目は赤色。_1)
	分布の概要	インドから東南アジア、中国、朝鮮半島にかけて分布し4亜種に分けられる。北方のものは冬期に南下する。日本には2亜種が分布し、亜種ヒクイナ <i>P. f. erythrothorax</i> は、北海道、本州、四国、九州に主に夏期に生息し繁殖するが、冬期は南に渡り、一部は本州中部以南で越冬する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、主に夏期に平野部に生息し繁殖する。丘陵地や山間部でも記録がある。稀に越冬する。_1)
	繁殖期等	夏鳥。繁殖期は5月から9月で、イネ科の株の中などに営巣する。_1)
確認状況	Aブロックで延べ3個体、Cブロックで延べ4個体、Dブロックで延べ5個体、湿地等において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖・採餌環境等となる水田や淡水湿地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えけるとともに、同様の環境はC・Dブロックの低地部や水辺等に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	



確認個体(H23. 5. 19撮影)

備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(耕作地(水田)、河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-32 重要な鳥類の予測結果 (17. タマシギ)

科名	タマシギ科	
種名	タマシギ	
重要性	絶滅危惧Ⅱ類(VU) (レッドデータブックあいち2009) 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省第4次レッドリスト)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 県内平野部の淡水湿地、主に水田に生息し繁殖するが数は少ない。その大半が夏鳥であり一部は越冬している。農業政策の変更で水田が休耕でなく、麦や大豆への転作による乾田化により水田の土壤生物や水生生物の生態系が崩れたこと、さらに都市化や道路建設等により生息に適した環境が消失しており、絶滅の可能性が増大している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 かつては、県内の平野部の水田で春期から夏期にかけて稀ならず見られたが、近年は、特に都市近郊では姿を見ることが難しい程に減少している。水田の耕作制限が、以前は休耕で保障されたものが麦や大豆への転作となり、周期的に乾燥化されることで餌となる土壤生物や水棲生物が消滅していることが最大の要因である。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	平野部の休耕田や湿田などの淡水湿地に生息する。繁殖は一妻多夫性で、抱卵から育雛までを雄が行う。冬期は、休耕田や河川敷などで数羽から十数羽の小群をつくり生息する。水生昆虫や小型の無脊椎動物を採食する。繁殖期に雌は、夜間にコーッ、コーッ、と続けて鳴く。_1)
	形態	全長23～28cm。成鳥雄は、頭部から上面は暗褐色で黄褐色の頭中央線があり、目の周辺には勾玉型の黄褐色の斑がある。肩から背にかけて黄褐色の線、肩から胸にかけて太い白線がある。成鳥雌は、目の周辺の斑が白色で、顔から上胸が赤褐色、上面は暗緑褐色で下面が白く、雄に比べて鮮やかである。_1)
	分布の概要	インドから東南アジア、中国、アフリカ、オーストラリアに分布し2亜種に分けられる。日本には、主に本州中部以西に周年生息し繁殖するが、宮城県や山形県でも繁殖が確認されている。北陸地方以北のものは冬期に南下する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、平野部の淡水湿地に周年生息し、繁殖するが多くの冬季南へ渡る。_1)
	繁殖期等	留鳥。繁殖期は4月から10月頃で、湿田の畦など地上で営巣する。_1)
確認状況	Aブロックの耕作地において、猛禽類により捕食された痕跡と考えられる羽根が確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖・採餌環境等となる水田や淡水湿地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの低地部や水辺等に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	



確認状況(羽根) (H23. 10. 13採集)


備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (耕作地(水田)、河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-33 重要な鳥類の予測結果（18. イカルチドリ）

科名	チドリ科	
種名	イカルチドリ	
重要性	絶滅危惧Ⅱ類(VU)(レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 主に河川中流域の河川敷に生息し繁殖するが、近年は減少傾向にある。河川敷の公園化や堤防道路の拡幅等により環境の良い砂礫地が喪失しているうえに、人の侵入が増大するなど生息条件の悪化が著しい。県内における生息数にさらなる減少が認められることから、初版の準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類と評価された。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 河川中流域の砂礫地環境が減少している上に人の侵入が増加し、営巣環境が悪化している。また、以前に比べて平野部での越冬数が少なくなっている。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	繁殖期は、河川中流域の河原や中洲などの砂礫地に番いで生息する。地上に浅いくぼみを作り、小石や枯草などを敷いて営巣する。冬期は、河川下流域、平野部の水路、丘陵地の調整池畔の砂地、水の抜かれた池沼などで単独または小群で生息する。主に昆虫類を捕食し、ピオオ、ピオオと鳴く。_1)
	形態	全長19～21cm。頭頂と上面、雨覆は灰褐色で、下面は白く胸に黒帯がある。眼先から頬にかけては黒褐色で、眼の回りは細くて黄色の縁取りがある。嘴は、小型のチドリ類としては細くて長めで、脚は淡黄色。_1)
	分布の概要	ウスリー地方、中国東部および北部、朝鮮半島で繁殖し、冬期は中国南部からインド北部で越冬する。日本では、全国的に記録があるが、繁殖は本州と四国に限られている。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、主に河川中流域の砂礫地に生息し繁殖する。冬期は、河川下流域、平野部の水路、池沼の畔などでも見られる。_1)
	繁殖期等	留鳥。繁殖期は3～7月。_5)
確認状況	Dブロックで延べ5個体、ため池の泥地において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖地は確認されなかったことから、対象道路付近における繁殖の可能性は低く、繁殖への影響はないと考えられる。 採餌環境等となる水辺の砂礫地や砂地等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えたとともに、同様の環境はA・B・C・Dブロックの河川やため池周辺に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-34 重要な鳥類の予測結果（19. ケリ）

科名	チドリ科		 <p>確認個体 (H23. 10. 13撮影)</p>
種名	ケリ		
重要性	情報不足 (DD) (環境省第4次レッドリスト) 〈減少の要因〉 宅地開発等による生息地の消滅_4) 湿地・湿田の減少_11)		
一般的な 形態・生態等	生息環境	田、畦、河川敷、荒地などに枯れ草などを敷いて営巣する。地上で昆虫類や草の種子などを採食する。_4)	
	形態	全長約35.5cm。他の種に比べて脚が長い。頭と胸は灰色で胸と白い腹との境は黒い。上面は褐色で脚は黄色。地上にいる時にはあまり目立たないが飛ぶと明らかな模様が出る。_8)	
	分布の概要	本州で局地的に繁殖し、近畿、東海、北陸地方が多い。_4)	
	生息地	農耕地で繁殖している。_4)	
	繁殖期等	留鳥。繁殖期は3～6月_4)	
確認状況	A～Dブロックの水田全域において多数確認された。5月にはDブロックの水田において雛が確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖・採餌環境等となる水田は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの低地部に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10（耕作地(水田)）を参照。

表8-9-35 重要な鳥類の予測結果 (20. ウズラシギ)

科名	シギ科	
種名	ウズラシギ	
重要性	絶滅危惧Ⅱ類(VU)(レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田などの淡水湿地に渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少し、近年では限られた場所に少数が生息するに過ぎない。加えて、沿岸域の淡水湿地は少なくなっており、絶滅の可能性が増大している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 県内の主な生息地として、愛西市(旧立田村)、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られたが、近年は、各々の場所で数羽から多くて十羽程が記録されるに過ぎず、著しい減少傾向にある。麦や大豆への転作による水田の乾燥化で水田の生物相が破壊されていることが、この種をはじめとする淡水湿地に生息するシギやチドリが生息環境を悪化させている。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	春期は、4月中旬頃に水田や休耕田などの淡水湿地に渡来し、5月下旬に渡去する。数羽から20羽程度の群で生息し、水中や地上の小動物を捕食する様子が見られる。時には体を震わせながら羽を上げ下げする求愛行動を行うこともある。秋期は春期に比べて数が少ないが、7月から10月にかけて、干潟や埋立地の水溜まりなどで1~2羽が見られる。_1)
	形態	全長17~22cm。夏羽は、頭部および上面が茶褐色で赤茶味が強く、軸斑が黒い。脇から胸にかけて明瞭な黒斑が密にある。冬羽と幼羽は、ともに脇や胸の黒斑が明瞭でないが前者は上面が灰褐色で、後者は茶褐色で模様は夏羽に似るが淡い。嘴は黒く基部に黄色があり、脚は全体に黄色。_1)
	分布の概要	シベリア東北部で繁殖し、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドなどで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、水田や休耕田などの淡水湿地に生息する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、主に春期に伊勢湾、三河湾沿岸の水田地帯に生息する。_1)
	繁殖期等	旅鳥。_5)
確認状況	Dブロックで1個体、水田において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の採餌環境等となる水田等の淡水湿地や干潟は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えけるとともに、A・B・C・Dブロックの河口部や低地部に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	



確認個体(H23.10.14撮影)

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(耕作地(水田)、河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-36 重要な鳥類の予測結果 (21. タカブシギ)

科名	シギ科	
種名	タカブシギ	
重要性	絶滅危惧Ⅱ類(VU) (レッドデータブックあいち2009) 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省第4次レッドリスト)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸部の水田や休耕田などの淡水湿地に渡来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少している。水田を含む淡水湿地にのみに生息できる種であることから、沿岸域の淡水湿地が少なくなっており絶滅の可能性がかなり増大している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 県内の主な生息地として、愛西市(旧立田村)、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺があげられ、その他、平野部の水田や中小河川でも少数が見られる。1980年代半ばまでは、これらの地区で普通に見られた。近年は水田の転作による乾燥化で餌となる土壤生物や水棲生物が消滅していることで、県内での生息数が激減している。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	春期は4月上旬から5月中旬頃まで、秋期は7月から9月にかけて、水田や休耕田などの淡水湿地に渡来し、数羽から20羽程度の群で生息する。内陸部の中小河川や養魚池などで越冬することもある。干潟を始め海岸部の塩水湿地で見られることはほとんどない。_1)
	形態	全長19～21cm。頭部および上面が暗褐色で白斑が散在する。眉斑は白く明瞭で眼の後方まで伸びる。夏羽は、顔、頸から胸側にかけての縦斑が明瞭だが、冬羽と幼羽では目立たない。脚は黄色く長い。_1)
	分布の概要	ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。日本には、春と秋の渡り時期に渡来し、少数が越冬する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、主に春と秋の渡り期に伊勢湾、三河湾沿岸を中心とする平野部の水田地帯に生息する。少数は、内陸の中小河川などで越冬する。_1)
	繁殖期等	旅鳥。(繁殖期は5～7月)。_5)
確認状況	Dブロックで1個体、水田において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の採餌環境等となる水田等の淡水湿地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、C・Dブロックの低地部に広く分布する。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	



確認個体 (H23. 10. 13撮影)

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (耕作地(水田)、河川・ため池・湿地) を参照。

表8-9-37 重要な鳥類の予測結果 (22. ヤマシギ)

科名	シギ科	
種名	ヤマシギ	
重要性	準絶滅危惧 (NT) (レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 冬期に、主に平野部から丘陵地にかけての雑木林やその周辺の農耕地などで見られるが、沿岸部の埋立地に作られた植生や干拓地内の新しい農地などでも観察されている。本来の生息地では生息環境が悪化しており、沿岸部の新しい生息地は環境の変遷が早く安定しないことで、県内での確認数が減少していることから、初版情報不足から準絶滅危惧と評価された。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 県内では、平野部から丘陵地が本来の生息地と考えられるが、沿岸部の埋立地や干拓地に作られた新しい植生にも生息することが知られている。本来の生息地は開発や道路建設、農業形態の変化等で生息環境が悪化している。沿岸部にできた新しい環境は一時的であることが多く、植生が安定するとともに姿を消すことが大半である。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	冬期に雑木林やその周辺の農耕地、樹木の多い公園や緑地などで単独から数羽で生息する。山麓の水田、農耕地の堆肥置場、時に公園の芝生などで、夕方から夜間にかけてミミズなどの小動物を捕食する。_1)
	形態	全長33～35cm。額は灰色で後頭に太い黒褐色の横帯が4本あり、背面は赤褐色に黒色や灰白色の複雑な斑がある。下面は淡灰褐色で黒褐色の横斑がある。尾羽は黒褐色で赤褐色の横斑があり、先端部は灰色。雄は、雌に比べて尾羽が長く嘴が短い。_1)
	分布の概要	ユーラシア大陸北部、中部で繁殖し、冬期は南下するものがある。日本には、北海道から本州中部、伊豆諸島で繁殖し、冬期は、本州、四国、九州、沖縄に生息する。_1)
	生息地 (愛知県内)	本県では、冬期に平野部や丘陵地に生息し、山間部でも記録がある。_1)
	繁殖期等	冬鳥。(繁殖期は4～6月。)_5)
確認状況	Bブロックで1個体、耕作地付近の草地において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の採餌環境等となる雑木林や耕作地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はB・C・Dブロックの樹林地の周辺に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(樹林地、耕作地(水田))を参照。

表8-9-38 重要な鳥類の予測結果 (23. コアジサシ)

科名	カモメ科	
種名	コアジサシ	
重要性	準絶滅危惧(NT) (レッドデータブックあいち2009) 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (環境省第4次レッドリスト) 国際希少野生動物 (種の保存法)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期に伊勢湾、三河湾の沿岸部に生息し普通に見られるが、繁殖地は局地的である。大規模な繁殖地は埋立造成地に限られており、こうした環境は変動性が高く、1年から数年で消失してしまう。県内にはこの種が何年も継続して繁殖できる安定した生息環境が無いいため、年を追う毎に生息数は減少している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 名古屋港内、衣浦港内、三河港内等の埋立造成地で数百から数千羽規模の大きなコロニーを形成するが、事業所の立地等による土地の改変や植相の遷移による環境の変化などにより、繁殖環境は安定しない。また、河川敷や畑地で形成される小規模な繁殖地も、河川改修や耕作などによる攪乱を受けるため繁殖条件は良くない。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	県内には4月中旬に渡来し、夏期に、海岸、河口、河川、内陸の湖沼などの水辺に生息する。水面上空を飛び時に停空飛翔を行い、餌の小魚を見つけると水中に飛び込み捕食する。沿岸部の埋立造成地、畑地、河川の中州などでコロニーを形成し繁殖する。営巣は、地上に小さなくぼみを作り小石や貝殻を敷き、通常2～3卵を産む。繁殖後は、淡水の水溜りのある広い砂地に大群で集合する。秋の渡りの前には、こうした環境を求めて移動するが、県内で繁殖したものが静岡県以東で確認された例もある。_1)
	形態	全長約22～28cm、翼開長47～55cm。上面は青灰色で下面は白色。尾は白色で、外側尾羽が長く飛翔時は燕尾状に見える。夏羽は、頭頂から後頭にかけて黒色で、額は白色で過眼線は黒色、嘴は黄色で先端が黒色、脚は橙黄色。冬羽は、額の白色が頭頂まで広がり、嘴と脚は黒色。_1)
	分布の概要	ヨーロッパ、ロシア西部、中東、インド、東南アジア、オーストラリア、アフリカ、北アメリカ中部から南アメリカ北部で繁殖し、北方のものは冬期に南下し越冬する。日本には、夏期に主に本州以南に生息し繁殖する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、夏期に伊勢湾、三河湾沿岸および河口部で繁殖し、平野部の水辺で見られる。春から初夏にかけては、遠州灘沿岸でも見られる。_1)
	繁殖期等	夏鳥。繁殖期は5～7月。_5)
確認状況	Aブロックで延べ4個体、Bブロックで延べ約40個体、Dブロックで延べ約10個体、河川やため池等において確認された。Bブロックの造成地においては、繁殖を示唆する行動が確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖が示唆された場所は、実施中の造成工事に伴って一時的に生じたものであり、その環境が本事業の実施段階まで維持される可能性は低いことから、工事の実施による繁殖への影響はないと考えられる。 採餌環境等となる水辺は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えらるとともに、同様の環境はA・B・C・Dブロックの河川やため池に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	



確認個体 (H23. 6. 9撮影)

備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (河川・ため池・湿地) を参照。

表8-9-39 重要な鳥類の予測結果 (24. オオコノハズク)

科名	フクロウ科	
種名	オオコノハズク	
重要性	準絶滅危惧 (NT) (レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期は丘陵地および山間部の林で繁殖し、冬期は平野部の雑木林や工業地帯のグリーンベルトなどにも生息するが数は少ない。県内における繁殖期の生息確認記録は何例か知られているが、2008年に行った夜間調査では繁殖期の確認がされなかったことから、繁殖期の生息数はかなり少ないものと考えられ、初版情報不足から準絶滅危惧と評価された。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 繁殖については、尾張地方と西三河地方の丘陵地や山間地で、繁殖期に鳴き声や姿が確認されており、巣箱に営巣した例も報告されている。冬期は、丘陵地や平地の雑木林、社寺林、屋敷林、臨海部の緑地などで記録がある。また、晩秋から初冬にかけては、自動車やガラスとの衝突事故などで保護される例が稀ならずある。夜行性で観察し難いため生息状況は明らかでないが、樹洞のある木が少なくなっていることから生息条件が悪化しているものと考えられる。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	樹洞で繁殖し、夜間に小型の鳥類や哺乳類、昆虫などを捕食する。人家の軒先、巣箱で営巣することもある。冬期は、平野部の林で埒（ねぐら）が見つかることがある。ウォツ、ウォツと鳴く。_1)
	形態	全長24～25cm。全身が灰褐色で上面は黒色や灰色の複雑な斑があり、胸に黒褐色の虫食い状の斑がある。後頸に灰白色の大きな斑があり、耳の羽角は長めで目の色は橙色。趾に羽毛がある。_1)
	分布の概要	ネパール、中国東北部、朝鮮半島、台湾、マレー半島、大スンダ列島、バリ、カンゲアン諸島に分布する。日本では、小笠原諸島を除く全国で繁殖し、北方のものは冬期に南下する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、丘陵地および山間部の林で繁殖し、冬期は平野部の雑木林にも生息する。_1)
	繁殖期等	留鳥。夏期は丘陵地および山間部の林で繁殖する。_1)
確認状況	Aブロックの植栽内において、猛禽類により捕食された痕跡と考えられる羽根が確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖・採餌環境等となる樹林地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの丘陵地に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	



確認状況(羽根) (H23. 6. 9撮影)

備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(樹林地)を参照。

表8-9-40 重要な鳥類の予測結果 (25. クロツグミ)

科名	ツグミ科	
種名	クロツグミ	
重要性	準絶滅危惧(NT) (レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期に原生林や二次林に生息するが、分布が局地的で数は少ない。近年県内各地の二次林で繁殖期の確認例が増えていることで、初版絶滅危惧Ⅱ類から準絶滅危惧と評価されたが、今後の推移を注視する必要がある。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 低山帯から標高1,000mを越える茶臼山まで生息し、他の大型ツグミ類に比べて垂直分布は広いが、局地的で数は少ない。低山帯での繁殖場所は、自然性の高い二次林に限られている。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	丘陵地から山間部にかけての混交林や明るい針葉樹林に生息し繁殖する。地上で昆虫やミミズを捕食するほか、樹上で木の実を食べることもある。囀りは、キョローン、キョローン、キョコキョコなどパターンが複雑で声量が豊か。_1)
	形態	全長21.5cm。雄は腹と下尾筒が白いほかは全身が黒色で、腹の上部から脇に三角形の黒斑があり、嘴と脚は黄色で眼の回りに黄色の縁取りがある。雌は上面がオリーブ色味のある暗褐色、下面は白色で黒褐色の斑があり、脇と下雨覆は橙褐色。_1)
	分布の概要	中国中部の山地と日本の九州以北で繁殖し、中国南部とインドシナ半島北部で越冬する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、夏期に丘陵地から山間部に生息し、春と秋の渡り時期には市街地でも見られることがある。_1)
	繁殖期等	夏鳥。夏期に原生林や二次林に生息する。_1)
確認状況	Bブロックで1個体、竹林付近において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の繁殖・採餌環境等となる樹林地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えたとともに、同様の環境はC・Dブロックの丘陵地に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	


備考) 繁殖・採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(樹林地)を参照。

表8-9-41 重要な鳥類の予測結果 (26. ホオアカ)

科名	ホオジロ科	
種名	ホオアカ	
重要性	絶滅危惧Ⅱ類(VU) (レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 夏期に山間部の草原に生息し繁殖するが、繁殖地は局所的で繁殖数はごく少なく、現在の生息環境が変動した場合は愛知県内から繁殖個体が絶滅する危険性が高まる。冬期は平野部の農耕地や水路の土手などで見られるが数は多くない。県内繁殖種として絶滅の危険性が極めて高くなっていることで、絶滅危惧Ⅱ類と評価された。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 1980年代までは豊田市の三河高原牧場や茶白山の牧場などでも繁殖期に観察されていたが、現在では確認されなくなっている。最も確認数の多かった池ノ平牧場でも近年は確認されないこともあり、愛知県内での繁殖個体はほぼ絶滅に近い状態にある。原因として、県内における畜産業の形態変化などが考えられる。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	草原の中の草株の根元に、枯草を主材とするわん形の巣を作る。草の種子を主食とする。冬期は、平野部の農耕地や水路の土手などに単独から数羽の小群で生息する。チッチン、チチチュ、チチュと早いテンポで囀る。地鳴きは、チッと聞こえる。_1)
	形態	全長16cm。夏羽は、頭部が青灰色で黒色の縦斑があり耳羽は赤褐色で、背は褐色で黒褐色の太い縦斑があり、下面は白色で胸に黒色と茶褐色の2本の横帯があり脇に明瞭な縦斑がある。冬羽は、頭部と下面に褐色味を帯びる。尾は褐色で外側尾羽2対に白色斑があり、脚は肉色。_1)
	分布の概要	ヒマラヤ西部、中国北東部および南部、シベリア南東部、モンゴルで繁殖し、北方のものは南下し、冬期に朝鮮半島南部からインドシナ北部に生息する。日本では、夏期に九州以北で繁殖し、北方のものは冬期に暖地へ移動する。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では、夏期に山間部の高原に生息し繁殖する。冬期には、平野部の農耕地などに生息する。_1)
	繁殖期等	冬鳥(夏鳥)。夏期に高原や牧場など、山間部の開けた草地に生息し繁殖する。_1)
確認状況	Dブロックで1個体、河川沿いの草地において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の採餌環境等となる草地や耕作地は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えらるとともに、同様の環境はC・Dブロックの水田周辺等に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	


備考) 採餌環境等の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(草地、耕作地(水田))を参照。

表8-9-42 重要な爬虫類の予測結果 (27. イシガメ)

科名	イシガメ科		 <p>確認個体 (H23. 5. 17撮影)</p>
種名	イシガメ		
重要性	準絶滅危惧 (NT) (環境省第4次レッドリスト) 〈減少の要因〉 低山地の沢周辺の樹林伐採などによる環境悪化や土地開発などによる生息地消失が進み、ペットの商業用捕獲の影響で減少していると推定される。_2)		
一般的な 形態・生態等	生息環境	山間、丘陵の河川周辺や低湿地、湖沼および水田周辺に生息する。雑食性で植物質、動物質を広く食する。_2)	
	形態	甲長は雄が14cm、雌が21cm程度。背甲は茶褐色、原甲は黒褐色、頭部背面は黄褐色。_2)	
	分布の概要	日本固有種。本州、四国、九州と種子島、五島列島、佐渡島などの島嶼に分布。_2)	
	繁殖期等	秋から春にかけて水中で交尾し、6～8月に産卵する。_2)	
確認状況	Aブロックで1地点(2個体)、Bブロックで5地点(7個体)、Cブロックで2地点(2個体)、Dブロックで9地点(10個体)、河川やため池等において確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の生息環境となる水辺は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えらるとともに、同様の環境はA・B・C・Dブロックのため池や河川等に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		


備考) 生息環境の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (河川・ため池・湿地) を参照。

表8-9-43 重要な両生類の予測結果 (28. トノサマガエル)

科名	アカガエル科		 <p>確認個体 (H23. 7. 8撮影)</p>
種名	トノサマガエル		
重要性	準絶滅危惧 (NT) (環境省第4次レッドリスト) 〈減少の要因〉 圃場整備や水田の減少、家屋・道路の建設やそれともなう水質汚濁、河川敷の公園化などの生息環境の破壊や悪化によって存続基盤が脆弱化している。_9)		
一般的な 形態・生態等	生息環境	非繁殖期は水田などの周辺の森林や草地で生活し、土中で冬眠する。水田、溝、池などの浅い止水で繁殖する。_9)	
	形態	体長55～90mmでみずかきはよく発達し、背線側隆条と、短くて弱い不規則な隆条をもつ。背面は雄で金または緑色、雌で茶褐色。各所で混生するナゴヤダルマガエルより体が大きく、後肢は長く、常に背中線を持ち、背面の黒色斑紋が連続し、雄の婚姻色が発達し、腹面に斑紋を欠き、鳴き声が短いことで区別される。_9)	
	分布の概要	本州（仙台平野から関東地方を除く）、四国、九州に分布する。_9)	
	繁殖期等	4～6月に1回繁殖する。幼生は6月下旬～9月に変態、上陸する。_9)	
確認状況	Bブロックで1地点、Cブロックで16地点、Dブロックで15地点、水田等において多数確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の生息環境となる水田等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの河川やため池周辺に広く分布する。 また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。 以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 生息環境の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 ((耕作地(水田)、河川・ため池・湿地))を参照。

表8-9-44 重要な両生類の予測結果 (29. ナゴヤダルマガエル)

科名	アカガエル科		 <p>確認個体 (H23. 5. 17撮影)</p>
種名	ナゴヤダルマガエル		
重要性	<p>絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (レッドデータブックあいち2009) 絶滅危惧ⅠB類 (EN) (環境省第4次レッドリスト)</p> <p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 比較的個体数の多かった尾張部でも、近年、住宅建設や開発によって、生息域の水田が都市近郊部で急速に消滅し、本種の個体数が少なくなっている。あわせて従来から個体数の少なかった三河部でも個体数がかなり減少している。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 尾張地方は密度が高く、南部のハス田が広がる地域が多い。知多半島部では全体に分布が見られる。渥美半島では田原市に分布する。豊橋市ではほぼ絶滅状態。西三河地区は生息密度が低い。都市近郊における水田の消滅も、本種の減少の大きな要因である。_1)</p>		
一般的な 形態・生態等	生息環境	本種は水辺から離れることがなく、生涯を通じて低湿地で生活する。繁殖は主に水田で、浅い池、沼など浅い止水で繁殖する。_1)	
	形態	体は比較的頑丈で、頭部はやや小さい。体長は雄で35～62 (平均56) mm、雌で37～73 (平均63) mm。トノサマガエルよりずんぐりした体型である。体表面の黒褐色の斑紋は孤立するが変異が多い。背中線を持たないが、愛知県産は背中線のあるものが多い。腹面の網目状斑紋は愛知県産ではあまり顕著ではない。_1)	
	分布の概要	日本固有種。国内では東海から近畿地方に分布する。_1)	
	生息地 (愛知県内)	県内では、新城市、豊川市、豊田市 (旧稲武町、旧旭町を除く) 瀬戸市、春日井市、犬山市を結ぶ線の西側に分布する。三河部では新城市作手地区を除くと密度が非常に低い。_1)	
	繁殖期等	5～7月ごろ。_10)	
確認状況	Cブロックで3地点(5個体)、Dブロックで11地点(約20個体)、水田等において確認された。		
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の生息環境となる水田等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えるとともに、同様の環境はC・Dブロックの河川やため池周辺に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。		

備考) 生息環境の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10 (耕作地(水田)、河川・ため池・湿地)を参照。

表8-9-45 重要な両生類の予測結果 (30. ツチガエル)

科名	アカガエル科	
種名	ツチガエル	
重要性	情報不足(DD)(レッドデータブックあいち2009)	
	<p>〈レッドデータブックあいち2009選定理由〉 幼生が変態まで2年を必要とすることから、乾田化と河川改修による水路の環境変化にともない、平野部からほぼ姿を消してしまった。情報が平野部に多いヌマガエルとの混同が多く、標本の裏付けのある情報が不足している。将来絶滅危惧種に移行する可能性もあり、評価を情報不足とした。_1)</p> <p>〈減少の要因〉 乾田化と河川改修にともない幼生の越冬ができなくなっていて、平野部の乾田地帯では見られなくなった。水路のU字溝化と水田の乾田化で幼生の越冬が出来なくなったことが最大の減少要因である。_1)</p>	
一般的な 形態・生態等	生息環境	平地から低山地にかけて分布し、高地には少ない。幼生が翌年夏に変態することから、冬季水の残る水辺の近くに生息する。_1)
	形態	頭部は大きく、頭幅と長さはほぼ同じ。吻は直線状に狭まるが先端は比較的鈍い。吻の背面と頬は明らかに凹む。体色は暗灰色から灰褐色で、不規則な黒い斑紋を散布する。背中線に黄白色の縦状のある個体がある。背面にいぼ状の不規則な隆条突起を持つ。体長は雄37~46(平均41)mm。雌44~53(平均50)mm。ヌマガエルによく似るが、ヌマガエルは、いぼ状突起が少なく、腹面が白い。鳴き声も異なる。_1)
	分布の概要	国内では北海道西部、本州、四国、九州、佐渡島、隠岐志摩、壱岐島、五島列島に分布。国外では朝鮮半島、中国北東部に分布。_1)
	生息地 (愛知県内)	県内では平野部から丘陵部、山間部に生息。_1)
	繁殖期等	5~8月ごろ_10)
確認状況	Dブロックで1地点(1個体)、河川沿いの土手において確認された。	
予測結果 (工事の実施及び道路の存在)	本種の生息環境となる水田等は、工事の実施により一部改変されるが、改変量は最小限に抑えらるとともに、同様の環境はC・Dブロックの河川やため池周辺に広く分布する。また、道路の存在によって、工事による改変以外に新たな改変はない。以上のことから、本種の生息環境は残ると予測される。	

備考) 生息環境の改変の程度については「第8章第11節生態系」表8-11-7及び表8-11-10(耕作地(水田)、河川・ため池・湿地)を参照。